

伊東俊太郎先生への謝辞

立木 教夫

これまで伊東俊太郎先生から数多く御指導いただきましたこととの一端を記し、感謝の気持ちを申し述べたいと思います。

*

私が伊東俊太郎先生にはじめてお目にかかりましたのは、一九九二（平成四）年一月二十五日でした。この日はモラロジー研究発表会が行われ、その懇親会の席で、永安幸正先生が、私を伊東先生に紹介して下さいました。当時、私は、『現代科学のコスモロジー——人間のための物質・生命・情報論』（成文堂、一九九二年）という本の出版に向けて最後の調整を行っていました。先生に、校正ゲラ一式をお目につけて、「この本の帯の文章を御執筆いただけませんか」とお願いしました。先生は、「書きましよう」と受けてくださいました。このとき一気に世界が明るくなったよう

に感じたことを明確に覚えていきます。

次に、思い出すのは、一九九四（平成六）年十一月二十日に、大澤俊夫先生のお供で西荻の先生のお宅を訪問した時のことです。先生は和服を着ていらっしゃいました。訪問の目的は、伊東先生を麗澤大学教授としてお迎えし、比較文明研究センター（比文研）を創立するための様々な条件を確定することでした。厳しい条件提示にもかかわらず、先生は、「うむ、そうですね」とおっしゃって、次々に受け容れられ、一九九五（平成七）年四月に、麗澤大学教授・比文研所長に就任されました。私は比文研の所員として、先生の近くで仕事をやる好運に恵まれました。先生は私に「比較科学技術史」の授業に出るようお誘い下さいました。比較科学史の体系的な講義を拝聴できるといふことで、毎回、わくわくしながら、聴講させていただきました。このとき書き取ったノートは四冊にもなりました。また、先生は、この年の六月から、『現代科学のコスモロジー』を取り上げて、一対一の「読書会」を何回か開いて下さり、貴重なコメントを数多くいただきました。informationを「形相の中に入れる」と語源的な説明をして下さったことや、「創発と情報、これをつくっていくことが面白い」と研究の方向性を示唆して下さいたことなど、今日の私の研究につながる手引きをいただきました。

比文研の通常の活動に加えて「科学倫理研究会」を立ち上げ

て、倫理道德との関係性が希薄になった現代科学の問題性を明らかにし、科学倫理学の構想を実現していかれました。

二〇〇六（平成十八）年に先生が麗澤大学を定年退職され名誉教授になられた後も、比文研の客員教授として、また、道德科学研究センター（道科研）の顧問として、御指導を賜る好運に恵まれました。道科研では、生命環境研究室の室員が順に発表し、先生のコメントを頂く研究会を開きました。あるとき、先生が「心の起源は社会にある」とおっしゃいました。このひところヒントとなり、私は「心・脳・社会システムとミラーニューロン」というタイトルを付した論文を『地球システム・倫理学会会報』（第五号、二〇一〇年）に発表することができました。

二〇一三（平成二十五）年に、私が比文研のセンター長を拝命したとき、若手研究者育成の目的で『伊東俊太郎著作集』（全十二巻、麗澤大学出版会、二〇〇八～二〇一〇年）をテキストとして「伊東俊太郎著作集を読む会」（「読む会」）を比文研の事業として立ち上げようと思い、先生に御相談しました。先生は、「ボクの著作を読んで下さるのであれば、出たいなあ。出ますよ」とおっしゃって下さり、スタートすることになりました。「読む会」では、各発表者がレジメを作成して発表し、それに対して、著者の伊東先生から直に御指導を頂くという、なんとも贅沢な研究会となりました。この「読む会」は二十四

回で終了し、これに引き続き、「伊東俊太郎先生を囲む連続談話会「宇宙と文明の歴史―われわれの由来―」（談話会）」がスタートしました。この「談話会」は伊東先生の御発案によるもので、「ボクが学生の頃、こういう講義を聴きたい」と思っていたものをやることにします」とおっしゃいました。全十四回で二〇一七（平成二十九）年七月六日に完結しました。

*

伊東先生が麗澤に来て下さって以来、今日まで一貫してわれわれを親身に御指導下さいましたこと、また、その御貢献の偉大さを思うとき、全くありがたく、心底より、先生、まことにありがとうございますと申し上げます。ここに先生の御健勝と御活躍を祈念し、またこれからも先生にお目にかかり、御話させていただけますことを、心より楽しみとさせていただきます。

人間として生きることの本質を

教えて下さった恩師

古川 範和

「あの人は偉い先生だよ……！」

モラロジ―研究所と麗澤大学を繋ぐ横断歩道で、すれ違いざま伊東俊太郎先生と挨拶を交わされた故・永安幸正先生は、同行していた学生の私に向かい、低く尖った声でそう呟かれた。未だ伊東先生を存じ上げていなかった私は、厳しく辛口であられた永安先生があれほど率直に敬意を表されたことに驚き、一体どんな先生なのかと不思議に思った。二〇〇六年の出来事であったと思うが、当時の私には、隣を歩かれている永安先生という恩師を翌年に失い、しかし数年後、そのとき横断歩道ですれ違った伊東先生から学ぶ機会を得て、こうしてキーボードを打つことになるなど、知る由もなかった。時の流れの妙を感じる。

私は伊東先生から数多くを学んできた。筆頭に挙げられるの

は言語の扱い方だ。言葉の意味、特に語源を徹底的に調べ上げ、その本来指すべき概念を明らかにした上で、訳語の質を吟味する。「権利」や「公共」などという日本語は、*right* や *public* の訳語として適切か否か。現代において「文明」は *civilization*、*「文化」* は *culture* の訳語として用いられるが、その意味するところはどう変遷してきたか。そこから始まる考察が「私見」を超えるのを、私は幾度も目撃してきた。

二〇一三年四月から二年間ほど月毎に開催された伊東先生を囲む勉強会では、『伊東俊太郎著作集』に基づき、文明の交流、五段階革命、風土―社会―文明の連関などについて主に学んだ。先生には、特に古代ギリシアの衰退からルネサンスまでの間にプラトンやアリストテレスの伝統がどう受け継がれたかを、十二世紀ルネサンスを中心とした世界史的文脈において、解説していただいた。そして西洋中心史観の誤りを指摘していただいたと同時に、わが国がいかに外来文化の恩恵に浴してきたかを省察する契機を与えていただいたが、日本が古代から、東アジアは勿論、地中海や中近東の文明から大いに影響を受けてきたことが改めて回想された。日本文化と呼ばれる伝統が、そもそも多様な外来文化との出逢いによって紡がれてきたことを肝に銘じていれば、自文化中心主義の野蛮性から自由でいられる。国家的次元においても個人的なレベルにおいても、平和

で円満な関係を築くために教養が要となることを、伊東先生は折に触れて示して下さい。

そこで改めて「教養」とは何かを考えてみると、それは確かに知識の体系を意味するが、あくまでも更なる知識へと導いてくれるような体系であり、知恵を含んでいる。先生のご研究は、個別の文明圏に関する知識を提供して下さいると同時に、「自然や社会に規定されつつ他と交流しながら進化していく」という文明の一般的性質を解明なさるので、聴講者が自身の関心領域に迫る際、あるいは日常生活において森羅万象を観察し解釈する際にも、新たな知見の創生を助けて下さる。平和や多様性といった社会の在り方、創造性や寛容さといった個人的徳目の価値が、先生の文明論を学ぶことで、身に沁みて理解できるのである。

人間として生きることの本質を教えて下さった、掛け替えない恩師である伊東先生の生き様を心に抱き、自らの人生を拓いて行きたいと思う。

世界平和実現の理想に向かって

大野 正英

服部英二先生は、道徳科学研究センターにとって長年の課題となっていたモラロジの国際化に関して、非常に大きく貢献していただきました。特に二〇〇五年にパリのユネスコ本部で開催されたユネスコ創立六十周年記念国際シンポジウム「文化の多様性と通底の価値―聖俗の拮抗をめぐる東西対話」は、モラロジ研究の国際化の進展にとって非常に重要な意味を持つものでした。このシンポジウムの開催にあたっては、服部先生の長年にわたるユネスコ本部への貢献とそこで築かれた人脈が大きな支えとなりました。

ユネスコと国際日本文化研究センターとの共催により開催されたこのシンポジウムにおいては世界中から時代を代表する知性とも呼べる多くの方々に参加され、連日にわたり非常に中身の濃い発表と熱い議論が交わされました。私もこのシンポジウムに参加させていただき、それぞれの発表者の高い見識とともに

に、人類が抱える問題に対して共に取り組もうとする真摯な態度に非常に強い感銘を受けました。このシンポジウムの成果は、英文と仏文の報告書としてユネスコ本部より刊行され、また日本語版は麗澤大学出版会から『文化の多様性と通底の価値』として出版されました。

シンポジウムのテーマとなった「文化の多様性」と「通底の価値」というキーワードこそが、服部先生の思想の中核を成すものであると言ってもよいかと思います。その当時、サミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」という概念が強い影響力を持ち続ける一方で、市場原理に主導される形でのグローバル化、文化の画一化が進行しており、その傾向は多少の変化はあれ、現在まで続いています。このような世界の状況に対して、服部先生は文明の衝突ではなく、文明間の対話でなければならぬということ、様々な機会を通じて繰り返し力説されてこられました。そして、浅薄なグローバルイズムに基づく文化の画一化の傾向を危惧され、それぞれの文化が持つ多様性・独自性を尊重しながらも、同時にその根底に流れる「通底の価値」に目を向けることの重要性を強調されてきました。

服部先生は、ユネスコ時代に主導されたシルクロード調査プロジェクトを通じて、諸文化が互いの文化に対して敬意を払い、互いに学び合ってきたことが、人類文明の発展につながったことを明らかにされてきました。地球規模での環境問題とい

う人類共通の問題に直面し、国家間、宗教間、文明間の対立が激化しつつある現在、文化相互の互敬の精神の復活とそれに基づく通底の価値の探求という服部先生の主張は、ますますその重要性を増しつつあります。

この方向性は、世界の諸聖人の教説の人類に共通する指針を見出そうとした、モラロジーの創立者廣池千九郎の目指したもののそのものであり、世界人類の平和幸福の実現を目指すモラロジー研究にとって、非常に大きな貢献をしていただきました。研究センターに対する今後いっそうのご指導をお願いしつつ、感謝の言葉とさせていただきます。

知を愛する情の人、服部英二先生への謝辞

竹中 信介

私が服部英二先生に初めてお目にかかったのは、二〇〇九（平成二十一年）年に入塾したモラロジー専攻塾での講義の場においてであった。学問の右も左も分からなかった私に、「人類の文明物語」とでも呼べる、壮大な文明譚を語って下さったことが、十年を経た今でも鮮烈な記憶と共に思い起こされる。先生はご自身が世界の各地で経験されたことをベースに、文明論や哲学について熱く語られる人であった。私はそのような先生の情報から、「世界に関わることへの使命感」を感じ取り、知らず知らずのうちに、比較文明学の世界に足を踏み入れることになった。

ここで、私が比較文明学を志した頃のエピソードを交えて、服部先生の思い出を記してみたい。専攻塾二年目のカリキュラムである「テーマ実践研修」にて、二〇一〇（平成二十二年）年にパリを訪れたときのことである。ある夜、私は二冊の本を手

にしていた。一冊は、先ごろ亡くなられた京都市派の巨人・梅原猛（一九二五—二〇一九）先生全訳注の『歎異抄』（講談社学術文庫）、もう一冊は同じく京都市派に縁の深い服部先生の『文明は虹の大河』（麗澤大学出版会）という論文集である。この二冊は、世界を一人で旅する孤独な日本人の私にとって、羅針盤であり、心の支えになるものであったのだ。私はそのことに、滞在中のユースホステルのベッドの上で、窓から射し込む月明かりのもと、はたと気づいた、というよりも体感したのであった。この時、憚りながらも「伴奏者としての服部先生」を身近に感じることにになり、密かに感謝の念を強めることになったのは、今となっては良き思い出である（そういえば、先生にはこの事で面と向かってお礼を伝えていなかったたので今度お会いした際に、お伝えしよう）。

先生は、「文学」を大切にされる人である。そのことは、先生の著作のタイトルを見ただけでも、よくわかる。例えば、先程の『文明は虹の大河』の他にも『出会いの風景』や『文明間の対話』などは、単なる学術書の範疇を越えた文学的含蓄を感じさせてくれる。先生は論文や講演原稿を作成されるとき、心に響く短文を提示される。例えば、「地球の砂漠化は、人の心の砂漠化が招来した」（服部先生）や「人間が今歩んでいる道を変えなければ、地球はイースター島の運命を辿るだろう」（クストー）など、人々の感性に訴えかけるものばかりである。

このような先生の文体や話術は、知的に客観的な事実を述べるだけの説明的文体や口調とは異なり、読者と聴衆を魅了してやまない。私自身、文章や講演原稿を作成する際、達意であること、心に響くことを心がけるようにしているが、そのことで先生に負うところは非常に大きい。

さて、本稿は服部先生への謝辞であるが、やはり先生ご自身が、「畏友」と称して尊敬されている伊東俊太郎先生にも触れないわけにはいかない。道徳科学研究センターの月例研究会にて、お二人の先生が若手の研究者に向かって、熱のこもったご指導をされる場面は、文字通り、真に迫るものであった。そのどの場面も昨日のことのように思い出される。私自身、自分の研究の足りなさを痛感し、大きく視野が開かせられる思いを何度も経験した。また、時に、発表に着想を得られた服部先生と伊東先生のお二人が（半ば発表者は付いていけないままに？）、アカデミックな話の花を咲かせられる場面があったのは強く印象に残っている。あのような知的興奮の場に立ち合い、味わえたことは私にとって一生の宝物になるであらう。

最後になったが、センターに長年関わってご指導いただいた服部先生に心からお礼の気持ちをお伝えするとともに、今後ともご都合の許す限り、センターにお越しいただければ幸いです。

服部先生、ありがとうございました。今後とも宜しくお願い

致します。

（平成最後の年、永い桜の季節に記す）